

バシュラールとミショー： 『空間の詩学』と「実験的な狂気」

瀬尾 周平

アンリ・ミショーのテキストが20世紀の様々なフランスの思想家たちに大きな影響を与えていたことは、これまで十分に論じられてきたとは言い難い。例えばジル・ドゥルーズ/フェリックス・ガタリの語る「器官なき身体」《Corps sans Organes》の概念が、アントナン・アルトーのテキストに依拠したものであることは広く知られているが、他方で『アンチ・オイディプス』以降のドゥルーズが「襞」《pli》、「内在平面」《plan d'immanence》といった概念や、思考の「速度」《vitesse》の問題について語る際、そのテキストがガタリとの共作であるなしにかかわらず常にミショーに言及しているという事実は、アルトーやブルーストのような作家達に比べると、これまで積極的には語られてこなかった。

しかし同時に、ミショーのテキストがドゥルーズの著作を通じて紹介されるだけでは、この詩人のフランス現代哲学に対する影響を正しく伝えることはできないだろう。なぜなら、ミショーのテキストが哲学者によって取り上げられるようになるのは、ドゥルーズ/ガタリの著作に端を発しているわけではないからである。ドゥルーズ/ガタリが彼らの著作の中で、ミショーを一人の思想家として語り始める以前に⁽¹⁾、例えばバシュラールやメルロ＝ポンティといった哲学者たちによって、彼のテキストはたびたび言及されてきた。本論では、その中でも最も早い段階からミショーの作品を自らのテキストに引用し、思考を展開したバシュラールの著書『空間の詩学』(*La poétique de l'espace*)を読み解きながら、バシュラールがミショーを引用することの射程が如何なるものであるかを考察する。

本論では、ミショーのテキストが20世紀のフランス思想に対して、どのような影響を及ぼしていたのかを明らかにする試みの一端である。そのため、バシュラール自身の思想を明らかにすること以上に、バシュラールとミショーのテキストがどのような視座のもとで交わっているのかを明らかにすることに重心をおいて分析を進めることとする。

1. バシュラールとサルトル

バシュラールが彼の思想を展開するための重要な参照項として、その他の詩人たちとともにミ

ショーのテキストを取り上げるのは、彼の著作『空間の詩学』第9章にあたる「内部と外部の弁証法」(La dialectique du dehors et du dedans)においてである。まずは彼がこの著作の中でミショーについて語る際に前提となっている議論を確認しよう。

この『空間の詩学』を読むと、直接的に思想家の名前が挙げられてはいないものの、彼は「意識の形而上学」« métaphysique de la conscience⁽²⁾ »と呼ぶものについて批判的に語っている。そして、フランスにおけるハイデガー受容に対して、バシュラールは様々な詩人のテキストを分析することで、批判的に検討を加えるという意図があるということも想定できる。例えばバシュラールによれば、何よりもまず「人間は家のゆりかごのなかに置かれる」« l'homme est déposé dans le berceau de la maison » ことで世界の中に存在し始めるのであり、存在が「世界に投げ出される」« jeté dans le monde » ことを一義的なものとして考えるある種の形而上学は、こうした空間、とりわけ「家」« maison » と存在の深い関係を無視し、早急に結論へと向かってしまっていると批判する⁽³⁾。

こうしたバシュラール形而上学批判の矛先は第一に、フランスにおけるドイツ現象学受容の中心にいたサルトルへと向いているのだろうか⁽⁴⁾。サルトルのいかなるテキストを念頭において、バシュラールがこうした批判的な検討を進めているのかについて、彼自身はこの著書の中で明らかにしてはいない。しかし、例えば『シチュエーション I』(Situations I) に収められたサルトルの以下のような文章とともに、バシュラールのこのテキストを読むと、「内密」« intimité⁽⁵⁾ » に根ざした思考から離れ、「外部」« dehors » に関する言説を打ち立てようとするサルトルに対して、バシュラールが様々な詩人のテキストを用いつつ反論しているという構図を仮定することができる。

我々はこうしてプルーストから解放された。そして同時に「内的な生」からも解放されたのだ。すなわち、我々はアミエルのように、肩に口付けする子供のように、我々の内密の愛撫と甘やかしを探し求めるのだが、それは無謀である。なぜなら結局のところ全て、我々自身に至るまでの全ては外であるからだ。そして外とは世界の中、他者たちの間のことである。我々が我々を見出すのは、何かわからぬ退却の中ではない。そうではなく道の上に、街の中に、群衆の真只中に、諸事物のなかの事物に、人々のなかの人に、我々は我々自身を見出すのである⁽⁶⁾。

サルトルはこの文章の中で、フッサールに依拠しつつ、「内的な生」« vie intérieure » から解放され、事物や人々との関係を一義的とする「外」« dehors » を中心とした存在を論じることの正当性を語っている。しかし、こうした「外」を出発点として存在について語る身振りは、詩人たちが語るような世界とのより根源的な関わりを見落としており、「世界に投げ出される」という二次的な段階へと早急に進んでしまっている、とバシュラールは考える。

早急な形而上学が説くように「世界の方に」投げ出される前に、人は家のゆりかごの中に置かれる。そしていつも、我々の夢想において、家は大きなゆりかごである。具体性を持つ形而上学はこの事実

が一つの価値、我々が夢想の中で立ち返る大きな一つの価値であればなおさら、この事実、この単純な事実を見過ごすことはできない。存在はすぐさま一つの価値である。生は良く始まる。生は閉じ、守られ、家のふところの中で暖かく始まるのだ⁽⁷⁾。(強調は原文による)

サルトルとバシュラールのテキストを、こうして半ば強引につき合わせてみると、この二人の対立関係が浮かび上がる。前者が当時のドイツ現象学の文脈に則して、プルースト的な「内密」に満たされた「内的な生」から解放されること、そして「他者」« autres »や「世界」« monde »として語られる「外」こそが、我々の存在そのものであると語るのに対して、バシュラールは「外部」の世界へと投げ出されるよりも前に、まず「家のゆりかごの中に置かれる」こと通じて我々は生を開始すると強調し、この「事実」を無視して「世界に投げ出された」現存在について語り始めるという行為は、あまりに早急であり、具体性に欠けると主張しているのだ。

サルトルは『存在と無』(*L'Être et le néant*)において、我々を脅かしうる存在との関係を語るが、それは何よりも「家」のイメージを存在論の出発点に据えるバシュラールとは対照的である。それは以下のようなサルトルの一節を読むとより明確になるだろう。

対自は存在の中に縛られ、存在に取り囲まれ、存在に脅かされ、自らを見出す。そして対自はそれを包囲する事物の状況を、防御や攻撃の反応のモチーフとして見出すのだ。しかし対自のこの発見は、事物の状況がそれに対して危機的であったり好ましかったりすることに対して、決定を自由に下す限りにおいて可能なのだ⁽⁸⁾。

サルトルにとって、「対自」« pour-soi »とはバシュラールが語るような「家」の中ではなく、否定を伴った意識のあり方である。それに対してバシュラールはここから、詩人たちの語る様々な「家」にまつわるイメージと「内密」な空間の諸価値について分析を進める。このようなバシュラールとサルトルの関係を仮定としつつ、前者にとってミショーのテキストを分析することが、いったいどのような射程を持っているのかを明らかにするために、この著作の「内部と外部の弁証法」の章へと進むことにしよう。

2. 詩的イメージと幾何学的表現

バシュラールは我々と世界が関わる場である様々な空間について語る中で、この関係を哲学的に記述する際、それを陰ながら規定している「幾何学的表現」« expression géométrique »を批判的に検討することを試みる。そして、我々が形而上学の文脈において用いる二項対立的な空間の比喩、例えば「開け」« l'ouvert »と「閉じ」« le fermé »のような二元論的な空間の理解が、「幾何学的」な先入観の上に成り立っているという点を指摘する。そして彼は、ジャック・ラカンのセミ

ネール内で、ジャン・イポリットが語った「外部と内部の神話」« mythe du dehors et du dedans »に関する発言を参照しつつ⁽⁹⁾、形而上学はこうした先入観に立脚して「存在」を「空間化」することで思考を展開してきたと述べる⁽¹⁰⁾。

バシュラールによると、例えば我々は、「内部」と「外部」のように、空間を二分法によって切り分けつつ様々な思考をおこなうが、この二つの項の関係は決して均衡のとれたシンメトリックなものではあり得ない。

空間を「幾何学的」« géométrique »に還元する思考の先に、バシュラールは様々な問題を見出す。例えばバシュラールによると、ドイツ語の「現存在」すなわち「ダーザイン」« Dasein »に関して、フランス語に翻訳された「現存在」« être-là »という語が喚起する空間と存在との関係は、根源的な存在のあり方を明らかにすることがないどころか、すでに「幾何学的」な先入観によって怠惰にも間に付されてこなかった先入観の上に成り立っている。

これに関してバシュラールは、「現存在」« être-là »というフランス語の訳語を用いる際、フランス語独自の調性によって、「そこ」« -là »という空間的な意味を含む部分が強調されると述べる。そしてその結果、この語は、「しばしば諸問題の存在論的なもろもろの側面を容赦無く要約する幾何学的な固定化のエネルギーとともに言われる⁽¹¹⁾」のであり、「外部化された場所」« lieu extériorisé »を強く感じさせることとなる。そしてこの語が用いられるその度に、我々の経験に関する、空間の様々な存在論的な考察が置き去りにされるとバシュラールは考える。

このようにバシュラールは、「幾何学的」なヒエラルキーに基づいた存在論を批判的に検討し、そこで見落とされてきた様々な存在と空間の関係を明らかにしようと試みる。このとき彼はミショーの以下の詩句を引用する。

空間、しかしあなたはこの真の空間である恐るべき内部—外部を捉えることはできない。

とりわけいくつかの影が、これが最後と張り詰めながら、彼らの「唯一の統一性」へと絶望的な努力を為す。そんなことをしてはいけないのに。私はそのうちの一つに出会った。

罰によって破壊され、この影は一つの物音でしかなかった、しかしこの物音は巨大であった。

広大な世界がまだこの物音を聞いているが、しかし影はただ唯一、一つの物音となり、もはや存在してはいなかった。この物音は、まだ幾世紀も続いていくであろうが、まるでそれが決して存在していなかったかのように、完全に消え失せることを運命づけられている⁽¹²⁾。(強調は原文による)

バシュラールによれば、これらの詩句を読み生きるとは、これまで間に付されてこなかった先入観に基づいた空間のイメージとともに記述される「現存在」の中心を揺さぶることへとつながる。詳しくバシュラールの分析を追っていこう。

このミショーのテキストにおいて、「影たち」« ombres »について世界が知りうるのは、彼らの存在を語る言葉と同定できないような、形式化されない「物音」« bruit »である。この「存在のざわめき」« rumeur de l'être »は詩的な空間と時間、すなわち「この真の空間である恐るべき内部—

外部」*« cet horrible en dedans-en dehors qu'est le vrai espace »*と、「幾世紀」*« des siècles »*にもわたる無規定な時間のなかを、それが存在していたことに誰も気が付かぬまま、消滅に向かうことを運命づけられている。こうしたミショーの詩において、時間と空間は、もはや我々の存在に関する言説を支えていた「幾何学性」を担保するものとしては現れない。

さらに詳しく見てみよう。バシュラールはミショーにおける存在が「罪ある」*« coupable »*存在として想定されていると述べる。詩に現れる「影たち」は幾世紀にもわたる「無化」*« néantisation »*の中で、「終わりつつある存在の逆流」*« remous de l'être finissant »*となり、最後の力を振り絞り「統一性」*« unité »*を目指す。こうして「影」としての存在は、存在と無の間を揺れ動き、その中心としての「統一性」と、そこからの散逸が常に反転し続ける。

「現存在」によって喚起される空間のイメージを用いても、詩人の「存在論的悪夢」*« cauchemar ontologique du poète »*とバシュラールが呼ぶ、ミショーの詩に現れるこの世界から逃れることはできない。なぜならこの「真の空間である恐るべき内部-外部」においては、我々の安息の地であるはずの内部の空間は、「影たち」である存在が既に散逸し、その中心を失い、明晰さをもたらす確固とした足場ではない。すなわち「そこ」や「ここ」に結びついて存在することを可能にする空間は、この詩の中にはないのだ。またその外部も、すでに言語化されない「物音」としての存在のざわめきが響き渡っており「存在の可能性」*« la possibilité de l'être »*をもたらすはずの空白は残されていない。こうした「存在論的悪夢」がもたらす苦しみの源泉は「罪ある」存在そのものであり、逃れるべき外部もなく、身を隠すべき内部もない。

フランス語では「そこ-存在」*« être-là »*と訳される「現存在」という語は、自らをこの世界の中に存在すると認識しているという意味で、自己省察を含む存在のあり方であるが、ミショーのこうした詩句において、もはや我々が立ち返ることのできるような自己は残されていない。そして「存在のアプリオリ」*« a priori de l'être »*としてミショーが我々に示すものは、まさしくこの曖昧さを本質とするような、存在と空間、時間の関係であるとバシュラールは解釈する⁽¹³⁾。

バシュラールはこうしてミショーの詩を読解しつつ、「親密な幾何学の惨劇の中でどこに住むべきなのか」*« Dans ce drame de la géométrie intime, où faut-il habiter ? »*と問う。ミショーの詩句に現れるような空間においては、先に引用したサルトル的な内と外の世界の切り分けのような、「幾何学的」な先入観を前提とした空間の比喩を用いた二項対立はもはや通用しない。

この内密な幾何学のドラマの中に住まわなければならない。自ら自身*« en soi-même »*に帰り、それによって自らを実存の中に位置づけよ、という哲学者の助言は、「現存在」*« être-là »*のしなやかなイメージが詩人の存在論的悪夢を生きた後には、その価値を、その意味作用をも失いやしないだろうか。[...]ここでは恐怖は存在そのものである。そのときどこへ逃げるのだろうか、どこへ避難するのだろうか。どのような外へ逃げることができるのだろうか。どのような避難所へ、避難できるというのか。空間は「一つの恐ろしき内部-外部」なのだ⁽¹⁴⁾。

バシュラールはミシヨーのこの詩を分析しながら、この「存在論的な悪夢」は「外部」« extérieur » からやってくるのではないと述べる。バシュラールにとって、ミシヨーの詩において存在を脅かすのは、外部の事物や人々ではない。「恐怖は存在それ自体」« La peur est ici l'être même » である。

3. バシュラールにおけるミシヨーと実験：ミシヨーの詩を読むとはどのようなことか

存在をめぐる議論において、バシュラールとサルトルのどちらが正しいのかを決定することは本論の目的ではない。そこで議論を一度バシュラールからミシヨーの側へと向け、バシュラールとミシヨーの関係についての考察をさらに進めることにしよう。ミシヨーにおける「空間」« espace » のテーマは非常に多岐に渡り、なおかつそれはテキストと絵画両方の実践にまたがる問題である⁽¹⁵⁾。ミシヨーの語る空間の多様性についていくつかの例を挙げるならば、例えばそれは選集の題名にもあるように『内部の空間』(*L'espace du dedans*⁽¹⁶⁾)である。しかし空間は単に何らかの箱のような入れ物の内側を意味するだけではない。それは最も親密なはずの「内部」が我々にとって最も異質なものとして現れるような『遠き内部』(*lointain intérieur*⁽¹⁷⁾)と呼べるような空間であり、こうした空間は「中心と不在の間」(*Entre centre et absence*⁽¹⁸⁾)に位置づけられるであろう。また「空間」自体が存在に敵対するものとしても現れることもあり得る(例えば「空間との戦い」« combat contre l'espace⁽¹⁹⁾ »というミシヨーの表現を考えることができる)。バシュラールは存在論的な枠組みの中で彼の詩句を解釈することで、こうしたミシヨー作品に現れる多岐にわたる空間のテーマの一端を読み取ったのだろうか。

しかし同時に別の疑問も浮かび上がってくる。それは、ミシヨーの詩がもたらす様々なイメージをバシュラールの思想と関連づけて分析する以前に、こうしたミシヨーの詩を読み、それを存在論的な議論と結びつけつつ語ることを、バシュラールはどのように正当化するのか、という疑問である。

バシュラールは我々を受け入れる世界の入り口としての「家」のイメージを、詩人たちのテキストに則しつつ論じ、「世界に投げ出された」存在のあり方、すなわち我々が世界という外部に晒されるあり方を絶対視することに警笛を鳴らす。しかしバシュラールがミシヨーの詩句を引用し、それを「受け入れ」« accepter »、「生きる」« vivre »と語るとき、我々は彼がミシヨーの作品の中に、単にミシヨーの詩句を、存在の根源的なイメージとして捉えることとは別のテーマ、すなわち「実験的な狂気」« folie expérimentale »のテーマを読み取った可能性を指摘できないだろうか。まるでバシュラールのテキストは、一編の詩が、幻覚剤が身体に作用するが如く、我々の想像力に対して新たな「空間」のイメージを生み出すことを正当化するような身振りに貫かれてはいな

いだろうか。

順を追って確認してみよう。バシュラールはここにきて、ミシヨーの詩作品を分析し、この試作品を「受け入れる」ことから彼のイメージの現象学を開始することを強調する。

私はアンリ・ミシヨーのページを読み、読み返し、内部空間に対する恐怖症としてこれを受け入れることとなる。それはまるで敵対する遠さが内密な空間である小さな細胞の中において、既に暴力的であるかのようだ。アンリ・ミシヨーは彼の詩によって、我々の中に閉所恐怖症と広場恐怖症を並列した。彼は内部と外部の境界を緊張状態にする。しかしこれによって、彼は心理学的視点からすると、心理学者たちが内密の空間を支配するときに用いる幾何学的直感の怠惰な確信を破壊したのである⁽²⁰⁾。

ミシヨーの詩句において、「内部」や「外部」という語によって示されるのは、もはや「幾何学的表現」によって正当化される空間ではない。ミシヨーが語る「内部」とは「遠くの敵対者が、親密な空間である狭い独房の中で既に苦しみをもたらしめているよう」な、空間に関わる恐怖症をもたらず空間のイメージであり、バシュラールはそれを「閉所恐怖症」« la claustrophobie »と「広場恐怖症」« l'agoraphobie »の併置であると読解する。

しかし、こうした「恐怖症」の根源としての空間に関する、ミシヨーの「誇張された」« exagéré » 詩的なイメージが、我々の「幾何学的」な思い込みを破壊するためには、空間を「幾何学的」なイメージに基づいて単純化するという習慣から逃れなくてはならない。バシュラールはそれを可能にするのは、ミシヨーの詩を読み返し、「受け入れる」« accepter » ことだと述べている。バシュラールは、詩的なイメージによって表現される複雑な空間の有り様を、「幾何学的」な単純さに従わせることなく、あくまでも個人化された現象学的対象として捉えなければならないと考えるのだ。そして、バシュラールはこの詩人のイメージを「受け入れる」ことを、「一欠片のハシッシ」によって引き起こされる幻覚と比較する。これは、理性的であるとされてきた「幾何学的」なイメージへの習慣的な依存と比べるならば、この見せかけの理性による習慣を宙吊りにするような「実験的な狂気」である。つまり「幾何学的」なヒエラルキーから空間を解放するためには、この「幾何学的」なイメージに支えられた理性的な主体から離れ、詩的なイメージにあえて従属するような「狂気」« folie »へと移行することが必要であると語られているのである。

私は、この詩人のイメージを一つの小さな実験的な狂気のように、それなしでは想像力の世界へと入り込めないような、潜在的な一欠片のハシッシとして歓迎した。そして誇張されたイメージを、少しだけより誇張し、この誇張を個人的なものにしなければ、どうやってこれを受け入れることができるだろうか。すぐさま現象学的な利益が現れる。それはこの誇張を引き伸ばすことで、実際にひとは還元習慣から抜け出す何かを得たのである。空間のイメージに関しては、ひとはまさしく還元することが容易かつ一般的な領域に属している。ひとはいつも、それが比喩に富んだやり方であろうとなかろうと、複雑さを消去し、内部と外部の対立する空間を確信することから出発するように我々を従わ

せる者に出会う。しかし、還元が容易であるならなおさら、誇張は現象学的により興味深いものでしかあり得ない⁽²¹⁾。(強調は本文による)

バシュラールの『空間の詩学』が出版された1957年よりも一年前の1956年1月、ミショーは彼のメスカリン服用実験を扱った最初の著作、『惨めな奇跡』(*Misérable Miracle*)を発表している。これまで見てきたバシュラールのテキストが、ミショーの薬物服用に関する著作を反映したものであると確定するためには、より根本的な草稿研究が必要となるだろう。しかし、仮にバシュラールがミショーのメスカリン服用に関するテキストを想定していなかったとしても、少なくともここで言われる「実験的な狂気」«*folie expérimentale*»という表現は、『惨めな奇跡』第4章の「狂気の経験」«*Expérience de la folie*»という題名を思い起こさせはしないだろうか⁽²²⁾。この章の中でミショーは十分な幻覚効果を及ぼすとされている副容量の六倍にあたるメスカリンを摂取し、その際の経験を詳細に記述している。このときミショーは薬物による幻覚作用の計算可能性を捨て去ったのだ。まさしくそれは薬物を摂取する際の、予想や仮説を一定の条件下で立証するという理性的な身振りから逸脱し、狂気に基づいた「経験」«*expérience*»へ移行したことを示しているだろう。

この理性を宙吊りにするような「実験」の身振りにこそ、バシュラールとミショーのテキストが共有する主題が横たわっているのではないだろうか。ミショーがメスカリンを用いた精神錯乱の実験を公にした翌年、バシュラールが彼の名前を引きながら、詩的イメージの現象学を、「一欠片のハシッシ」の服用に重ね合わせたことを考えると、ミショーの実践とバシュラールの「実験的な狂気」の思想が響き合っていたと考えないわけにはいかな。

より詳しくバシュラールの薬物に関する言及を見ていこう。バシュラールはミショーの詩を「一欠片のハシッシ」として受け入れることで、人々が容易に陥ってしまう空間のイメージの単純化から逃れることが可能だと語る。それはバシュラールが、イメージの単純化によって成り立つ、「幾何学」のヒエラルキーによって支配される世界からの離脱を、幻覚作用をもつ薬物が可能にすると捉えていることを示してもいるだろう。バシュラールはこの著作の第7章においても、詩的なテキストを薬物（ここではミショー自身が中心的に論じたメスカリン）と比較している。

もしも我々のイメージがメスカリンのような、何らかの薬物の効果のように与えられれば、理性的な哲学者もそれを許すであろう。それらのイメージはそのとき彼に対して生理学的現実を保持していることになるだろう。この哲学者は魂と身体の一の諸問題を解き明かすためにこれを用いるだろう。我々としては、これらの文学的資料を創造的現実として、純粋な想像力の産物としてみなす。なぜなら、想像力の行為が、知覚の行為と同様の現実的でないことがあろうか⁽²³⁾。(強調は本文による)

精神と身体の間を思考する理性的な哲学者は、幻覚剤によって引き起こされる我々の知覚の変容を、脳内の化学反応によって引き起こされる「生理学的現実」として捉える。バシュラール

はこの科学的な手法を、詩人の書いたテキストを読む彼自身の体験と重ね合わせ、まるで薬物によって身体にもたらされた知覚のように、詩的なイメージの効果を「想像的现实」として理解することを正当化しようとしている。ちなみに、この箇所の記述は、おそらくミショー以上に、モーリス・メルロ＝ポンティの1945年の著作『知覚の現象学』における、メスカリンに関する一連の分析⁽²⁴⁾に影響を受けている可能性が高いようにも思われるが、バシュラールの記述からだけでは、こうした影響関係を特定することはできない。しかし少なくともバシュラールは、文学的なテキストを「受け入れる」ことでもたらされる想像力を、薬物によってもたらされる幻覚体や知覚の働きをモデルとして考えているだろう。

ところでバシュラールにおける知覚と想像力の問題は、サルトルの主著『存在と無』において、既に批判的に取り上げられている⁽²⁵⁾。サルトルはバシュラールの用いる「物質的想像力」« *l'imagination matérielle* »が、実際にはむしろ主体の意識を前提とする「想像力」を排除し、物質の側にある「知覚」へと結びついていることを指摘する。こうしたサルトルからの批判へのある種の応答として、バシュラールの語る「実験」を捉えることもできるだろう。つまりバシュラールは、この「実験的な狂気」という言葉を用いることによって、またしてもサルトル的な「意識の形而上学」に対して応答しようと試みていると考えることができる。

詩的なテキストが、我々の精神に直接的な影響を与えているとバシュラールが考えているとみなすならば、彼の「実験的な狂気」という言葉は、まるで薬物によって引き起こされる幻覚が、想像力を介してそれを捉える主体のものなのか、それとも知覚される事物の側にあるのかを決定できないような経験へとあえて従属するような身振りを示しているだろう。それはミショーが『惨めな奇跡』において語っているように、精神の活動が計算可能な薬物の効果によって規定される「メタニックに捉えられたメタフィジック」« *La métaphysique, saisie par la mécanique*⁽²⁶⁾ »である。バシュラールのミショーのテキストに対する身振りは、知覚と精神の直接的な因果関係こそが、我々にとって本質的なものとして立ち現れてくることを肯定するかのようである。

4. ミショーとバシュラールにおける幻覚的なもの

想像力と知覚をめぐるバシュラールの立場を、さらに詳しく捉えるために、最後に『空間の詩学』をはなれ、『夢想の詩学』(*La Poétique de la rêverie*)におけるバシュラールのミショーと薬物への言及を分析してみよう。この著作の中で、身体的な次元に観察される知覚と、詩的なテキストによって可能となる想像力を同一平面上で語ることを可能にするために、バシュラールは再びミショーを引用しつつ、詩的イメージの「向精神性」« *psychotropisme* »、もしくは「向精神的イメージ」« *image psychotrope* »について語る。バシュラールは薬物によって精神活動をコントロールすることを論じた当時の医学的な研究に触れつつ、詩的なテキストの持つ「向精神性」

« psychotropisme » を認めようとする。バシュラールによると、「向精神的イメージは心的なカオスの中に小さな方向性を与える。心的なカオス、それは無為なブシュケの状態であり、イメージ無き夢想の最低限の存在である。ミリグラム単位の薬物学はこの潜在的な心的現象を豊かなものにする⁽²⁷⁾」のであり、彼が詩的イメージを、脳神経に対する薬物の影響と限りなく重なり合うものとして捉えていることがわかる。

それは先にバシュラールが批判的に検討を加えていた「意識的な形而上学」とは異なり、存在が常に詩的イメージに方向づけられ、多面的な様相を見せることで、「私」を「私」と呼ぶことができなくなるような存在様態に関わっている。

バシュラールがこの章で引用する、「アヘンは必要ない。そこで向こう側に生きることを選んだ者にとっては、全てが薬物である⁽²⁸⁾」というミショーの一節は、こうして存在論的な問いとして現れることとなる。それは「生理学的な現実」として示される知覚と限りなく重なり合う想像力を受け入れる「私」、「夢想」の中に浸り、薬物によって麻痺することもできる「私」、これらの多様な「私」を受け入れる「私」ならざる「私」を出発点として、我々はいかに存在について語ることができるのかという問いである。そして、こうした「向精神性」に立脚した詩的なイメージに関して、「手直しされた狂気でなければ、美しい詩とはいったいなんなのか⁽²⁹⁾」とバシュラールは問う。

この章が「夢想者の〈コギト〉」(Le « cogito » du rêveur) と題されていることからわかるように、バシュラールはデカルト以降の存在論において特権的な対象である、理性的主体を問いに付していることは明らかだ。こうしたバシュラールの記述は、先にみた「実験的な狂気」として語られたイメージと我々の関係を、再びミショーのテキストとともに取り上げたもののだとも考えられるだろう。

こうしたバシュラールの語る、存在の複数性を思考するという立場は、ミショーの作品において中心的なテーマとして扱われていることは言うまでもない。本論では議論の都合上、ここからさらにミショーのテキストを分析することはできないが、それでも何か一つ代表的な例を挙げるとすれば、彼の試作品「また変わらなければいけないのか」« Encore des changements » においてミショーは、この詩の語り手である「私」があらゆる動物や鉱物へと変化するイメージを通じて、統一された「私」に回収されないような、存在の可変性とでも呼ぶべき性質を描いている⁽³⁰⁾。

ここまで見てきたように、バシュラールは詩的イメージの問題を、ハイデガー哲学のフランスでの受容に顕著な空間イメージに基づいた存在論に対立するものとして語る。そしてミショーの詩句を「受け入れ」つつ、幾何学的な先入観に基づいた空間のイメージの解体について分析する中で、意識の活動としてではなく、主体と客体の関係が常に反転し、理性的な主体の統一性に基づいた存在論を不可能にするような経験をもたらす詩的イメージの「向精神性」という性質を、薬物の服用に準えた「実験的な狂気」というモチーフの延長線上に見出す。

もしもこうしたバシュラールのテキストに従うならば、そして薬物がそれなしでは知覚するこ

とのできない微細な知覚への回路を我々に対して与えるのだとしたら、我々が読む詩もまた、それなしでは到達できないイメージへと、詩によってのみ到達可能な想像力への回路へと、我々を運び去るような力を持っているということになる。こうしたバシュラールの思考は、科学的方法論にしたがって、幻覚を特定の薬物によって引き起こされた「生理学的現実」として捉えることができるように、常にミショーをはじめとして様々な詩人たちのテキストによって生み出される「知覚の行為と同様の現実的な」« aussi réels que les actes de la perception⁽³¹⁾ » 想像力に立脚している。バシュラールにとって「実験的な狂気」とは、我々の持つ先入観に基づく幾何学的な空間理解や、意識の活動としてのイメージという前提から離れ、詩的イメージを「受け入れ」、それなしでは到達できないこの現実について論じる試みであり、そしてこの試み自体が一つの現実を形作るような実践であり、「実験」であろう。

こうしたバシュラールのテキストにおいて、彼のミショー解釈や、ミショーの詩句の引用が、彼の作品全体から見たときに正しいものかどうかについては、さして重要なことではないようにすら思われる。知性によって設けられた慣習を捨て去り、我々の存在を深化させるような感情の「反響」« retentissement » について記述しようとするバシュラールが、「我々が現象学的に反響できるのは切り離されたイメージの水準においてである⁽³²⁾」と語っているように、『空間の詩学』においては、ある作家や作品全体が体系的に研究されるのではない（しかしこの点にこそ、絵画の鑑賞と読書行為を比較しつつ、絵画を自由に見るように、自由な読書を学ばなければならないと語るミショー自身の読書論と重なるとも言えるだろう⁽³³⁾）。そしてこの想像力に関わるものとして「知覚の行為と同様の現実的なもの」喚起するような詩句が、作品全体から切り離された形で取り上げられ、我々に「一欠片のハシッシ」のように与えられる。

そして、こうした詩的イメージの現象学へと向かうバシュラールのテキストそれ自体が、ミショー作品から彼が読み取った「実験的な狂気」の実践と重なり合っているように思われる。ミショーのテキストもまた、単にバシュラールの研究対象である個別の詩的イメージであるという以上に、バシュラール自身のおこなった詩的イメージの現象学という実践と響き合っている。こうしたバシュラールとミショーの関係は、ドゥルーズ/ガタリによるミショーのメスカリン服用に関する言及のような、これ以降のフランス思想とミショーの関係を方向づけたものでもあるかもしれない。ミショーの作品は、単なる分析の対象としてではなく、「実験」や「狂気」といった重要なモチーフを哲学者たちに提供しつつ、哲学的な領域と接木されたのではないだろうか。

注

- (1) ミショーはあくまでも詩人、画家であるが、ドゥルーズとガタリは、彼らの著書、『哲学とは何か』において、「エピクロスからスピノザ、スピノザからミショーまで、思考の問題とは無限の速さであっ

- た [...]」と述べ、ミシヨーをエピスロス、スピノザという二人の哲学者の延長上に位置付けている。
Cf., Gilles Deleuze, Félix Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie ?*, Minuit, 1991, p. 45.
- (2) Gaston Bachelard, *La Poétique de l'espace*, PUF, 1957, p. 26.
- (3) Cf., *Ibid.*
- (4) バシユラールとサルトル、ハイデガーの関係については以下の論文を参照。この論文では、バシユラールにおける「住まう」ことと、サルトル、ハイデガーの関係を詳細に分析している。Cf. Julian Lamy, « “La berceau de la maison” : la critique bachelardienne de “être jeté dans le monde” », in. *Revista Ideação*, Universidade Estadual de Feira de Santana (Brésil), 2012, 5 (25). hal-01831348.
- (5) この「内密」*« intimité »* という語は、物質的イメージの表面的な移ろいではなく、その内部のより根源的な深さと結びついたものを示すために用いられている。Cf. Gaston Bachelard, *L'Eau et les rêves*, José Corti, 1942, p. 8.
- (6) Jean-Paul Sartre, « Une idée fondamentale de Husserl », in. *Situations I*, Gallimard, 1947, p. 32. なお議論の都合上、本論の全ての引用文には筆者の拙訳を用いた。
- (7) Gaston Bachelard, *Op. cit.*, p. 26.
- (8) Jean-Paul Sartre, *L'Être et le Néant*, 1943, Gallimard, p. 533.
- (9) Cf., Jacques Lacan, « Commentaire parlé sur la verneinung de Freud », in *Écrits*, Seuil, 1966, p. 879-892.
- (10) Cf., Gaston Bachelard, *Op. cit.*, p. 191-192.
- (11) *Ibid.*, p. 193.
- (12) Henri Michaux, *Face aux Verrous*, in. *Œuvres complètes, tome II*, Gallimard, 2001, p. 525.
- (13) Cf., Gaston Bachelard, *Op. cit.*, p. 196-197.
- (14) *Ibid.*, p. 196.
- (15) Cf., Claude Mouchard, « Michaux, métamorphoses de l'espace », in., *L'Art et l'hybride*, Saint-Denis : Presses universitaires de Vincennes, 2001, pp. 83-102.
- (16) Henri Michaux, *L'Espace du dedans*, Gallimard, 1944.
- (17) Cf., Henri Michaux, *Plume précédé de Lointain intérieur*, in. *Œuvres complètes, tome I*, Gallimard, 1998, pp. 569-621.
- (18) Cf., *Ibid.*, pp. 571-572.
- (19) Cf., Henri Michaux, *Passages*, in. *Œuvres complètes, tome II*, Gallimard, 2001, pp. 310-312.
- (20) Gaston Bachelard, *Op. cit.*, p. 198.
- (21) *Ibid.*, p. 197.
- (22) Cf., Henri Michaux, *Misérable miracle*, in. *Œuvres complètes, tome II*, Gallimard, 2001, pp. 723-765.
- (23) *Ibid.*, p. 148.
- (24) Cf. Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945.
- (25) Cf. Jean-Paul Sartre, *L'Être et le néant*, Gallimard, 1943, p. 646.
- (26) Henri Michaux, *Misérable Miracle*, in. *Œuvres complètes, tome II*, Gallimard, 2001, p. 738.
- (27) Bachelard, *La Poétique de la rêverie*, 1960, PUF, p. 130.
- (28) Henri Michaux, *Plume précédé de Lointain intérieur*, in. *Œuvres complètes, tome I*, Gallimard, 1998, p. 588.
- (29) Bachelard, *La Poétique de la rêverie*, p. 147.
- (30) Henri Michaux, *La nuit remue*, in. *Œuvres complètes, tome I*, Gallimard, 1998, pp. 571-572.

(31) Gaston Bachelard, *La Poétique de l'espace*, PUF, 1957, p. 148.

(32) *Ibid.*, p. 8.

(33) Cf. Henri Michaux, *Passages*, in. *Œuvres complètes, tome II*, Gallimard, 2001, pp. 332-333.

